信疑の決判

安藤文雄

『教行信証』を貫く一つの課題性、それは法然によってその独立を宣言された浄土宗なる選択本願の仏道を開顕していくということである。しかし、その場合どこでどのように問題を押えていけばいいのであろうか。親鸞が特に課題的に思索を尽していくのは信巻以降である。それは、信心という一点において仏道の中心問題である成仏ということを決着していくということである。このことは、断惑証理という修道の体系で考えられてきた仏教が、全く新たな視点から明らかにされてきたことを意味している。今回はこのような問題を考えていくにあたって、まずその基本的視座を確かめる意味で『選択集』に依りながら、選択本願念仏が人間に自証されるについての人間自身の課題性を考えてみたい。

法然は『選択集』三心章深心の私釈で「当に知るべし、生死の家には疑を以って所止と為す。涅槃の城には信を以って能入と為す」と、成仏の問題が信疑の一点において決着されることを善導の『観経疏』深心釈（二種深信）から明らかにされるべきこととして述べてくる。では、成仏ということが信疑の一点で確かめられるということが、どうして為されてこなければならないのか。ここには当然まず行の問題がはじめにある。法然にとって信心ということは南無阿弥陀仏が選択本願の行であるということの領きのほかにはない。法然は「速かに生死を離れんと欲う」という宗教的要求に応答する行が選択本願念仏であることを「雑行（諸行、万行）」との決定的選びにおいて明らかにする。選択本願念仏、それは断惑証理という修道の体系における行ではなく、「未だ煩悩を断ぜざる凡夫、直ちに三界を出過する」という行である。一切衆生を平等に往生せしめることにおいて正覚を取ろうという誓願において選択された行である。法然は二行章において正行と雑行の得失を述べるにあたって五番の相対を設けて、南無阿弥陀仏は如来に親にして近であり、生涯を貫くこととして、人間に往生の業を成就する行であり、しかしこの行は人間の側からの関わりを決定的に拒絶する純粋なる浄土の行であると明示してくる。すなわち、選択本願念仏は、人間に超越的に、しかし人間それ自体と成ることによって成就していく行なのである。従って、ここに問題となってくるのはもはやそれが仏果に至るために行修されるべきか否かということではなく、雑行を捨てて正行に帰するという一点である。しかし、このことは相対的に二つの行を並べてそのいずれかを取捨選択するということではない。雑行ということはそれ自体が人間の要求に密着してあるような修道の在り方における行である。従って、念仏に帰するということは雑行という価値の世界に拘泥している人間の連続的志向性を断ち切るという、人間自身の根拠の転換に関わった問題なのである。そこに選択本願念仏に帰するということの確かめとして、三心を具足するということが問題となってくるのである。

善導によって聞き開かれた『観経』の三心は釈尊自開の散善の世界を通して、そこに「往生の正因」を明らかにするということである。従って三心釈において問題になるのは、人間の宗教的要求に孕まれる決定的な問題性を摘示して、散乱麁動する人間現実の只中に純粋なる願生心を成就するということであり、そのこと

が選択本願との値遇においてのみ成就するということである。

まず至誠心は釈尊の「誠を至せ」という促しのもとに賢善精進の相（スガタ）において廃悪修善を尽していくことによって自己の全行為全生活を真実たらしめて往生浄土を成就しようとすることである。それは人間が自己自身に完全性を希求する立場であり、自らの力によって自己の存在性を超えようとすることである。しかし、この誠を至せという教えのもとに賢善精進をはかる心が見たもの、それは廃悪修善ということによっては及びもつかない、そのような営為を無化してしまう罪悪煩悩の身という存在事実である。賢善精進・廃悪修善ということは人間が此の世界において無前提に絶対の価値と信じている立場であり、釈尊はそのような人間の理想に同意する形で至誠心を説かれるのである。自己存在に盲目的に生きている人間に、その自己存在に眼を開くべく至誠心が説かれてくるのである。至誠心を通して明らかになってくること、それは法然によって「雑行を捨てる」と語られる問題である。すなわち、廃悪修善を以って自己としている立場そのものの転換という問題である。「此の雑毒の行を廻して彼の仏の浄土に求生せんと欲する」というそのこと自体に問題が孕まれているということである。自己存在からの脱却の可能性を夢見るということ、そこに人間の深い迷盲がある。そのような夢想、連続的志向性を「此れ必ず不可なり」と断ち切ってくるのが、法蔵菩薩の永劫修行である。それは先の二行章に即して言えば衆生が自己存在からの脱却を企図して為す「雑毒の善」「雑毒の行」を否定して念々に衆生往生の業と成ろうという選択本願の行である。

このような至誠心の確かめをくぐって明らかになってくるのが続いての深心である。二種深信、それは「出離の縁あることな」き自身の信知が、同時に本願力に乗じてあることへの信知として語られる信である。それは出離の縁を求めて流転輪廻をはかっていくような自己の在り方の終わりにおいて、本願に乗托して生きるという在り方への立場の転換の表白であろう。そして、この深心釈を通して法然は「当に知るべ」きこととして、「生死の家には疑を以って所止と為し、涅槃の城には信を以って能入と為す」と語りかけてくるのである。ここに出離の縁を求め続ける人間の宗教的要求が選択本願への反逆として明らかにされてくる。現前の存在事実を離れて救いを仮想していくということ自体が、選択本願に疑惑的であるということが、「当に知るべ」きこととして語られる「疑」の問題であろう。二種深信は、そのような出離の縁を求めての過去と未来に流れ去る流浪の在り方を「自身は現に是れ」という今現在に統摂して現前の一念に立たしめる信である。それは、また「涅槃の城に能入する」という方向をもった生、一瞬一瞬にその完結と始めを持つ命の実相に目覚めをもって還っていくことを意味している。

法然によって明示された信疑の決判、すなわち、選択本願念仏の自証としての機法二種深信が、流転輪廻か往生成仏かを決着づけていく事柄であるということの指示は、また親鸞における教学的営為の基本的な視座を与えてくる事柄であったと思われる。そして、このことは当然、断惑証理という修道体系とは異った視点から仏教が明らかにされなければならないことを意味しているのである。